



川内八幡宮例大祭 (2002年9月15日)

ふるさとの祭は特別な感概を伴って思い出されるものである。本州最北の地、下北半島には近世に町場を形成したいくつかの港町を中心に、神輿渡御を柱とする神社祭礼が人々の情熱と誇りに支えられて現在も行われている。

江戸時代の紀行家、菅江真澄は、寛政5年(1793)の「田なべ」(今のむ

下北の山車祭礼

清野 耕司

(県民生活文化課県史編さんグループ)

つ市田名部)の祭礼について、人形を乗せ色鮮やかな幕をまとった山車が、笛・太鼓で囃され神輿の先払いをして練り歩く様子などを記している。下北一円から見物人が集まり、日が暮れても盆踊りが続くなど、にぎやかなものであったことが知れる。田名部は、江戸初期から南部盛岡藩の代官所が置かれ、田名部川によつ

て、周辺の湊の積み荷が集まる下北半島最大の町場として発展した。豊かな経済力を背景に、田名部まつりは生み出された。現在でも8月20日の例祭日には昔ながらに、近郊の栗山と目名の神楽がそれぞれ先払いとしんがりをつとめ、田名部五町のヤマ(山車)が神輿を先導して練り歩く。他にも大畑・下風呂・易

国間・蛇浦・大間・奥戸・佐井・脇野・沢・川内・大湊など、それぞれに古風を伝える祭礼が営まれていて。誌面の都合で全てを紹介できないが、大畑八幡宮例大祭は、9月14、16日、フナヤマ(船型の山車)二台を含む七台の山車が運行される大規模な祭礼である。蛇浦(風間浦村)折戸神社祭典は、8月14、17日、御神体を奥の院から遷し神輿に乗せる遷座祭に特徴があり、山車は一台だけだが恵比須山の灯と囃子が夜の海沿いの道を運行する光景は

印象的である。

さて、江戸時代の中・後期にかけて始まったとされる下北の祭礼は、海運がもたらした、いわば北前船が運んだ祭礼といえる。つまり、下北の町々が交流を持った日本海側あるいは太平洋側の町場から直接または間接的に移入されたものと思われる。先行するそれらの祭礼は、さらに大きな江戸や京・大阪の祭礼をモデルとしており、行き着く先は、最古の伝統を持つ京都の祇園祭である。こうして直接、間接に祇園祭の流れを汲む祭礼が、都市間の交流によって江戸時代に一種のブームとも言えるべき展開を見せたのである。下北の祭礼もこうした全国的な展開の中的位置づけられるかもしれない。

青森県史編さん民俗部会では、青森県の民俗の基礎資料集である『民俗編資料』の刊行を進めているが、『青森県史 民俗編資料 下北』は平成19年3月刊行予定である。